

なんだこれ。

嘘だろ、さっきまであんなに体が痛かったのに。

何でこんなに体が軽いんだ。

「どう？ すっきりするでしょ？」

柚香が僕の前でにっこりと微笑む。目もよく見える。

さっきまでコンタクト無しではぼやけて何も見えないはずだった目が、今では信じられないくらいにはっきりと見える。

「うん……嘘みたいだ」

「ね？ 顔色も良くなったし」

柚香がまたにっこりと笑う。

「私だって、あんなに肩こりがひどかったのに、今ではもう全然！」

「うーん、その割には相変わらずの巨乳だねえふげっ」

柚香のビンタが炸裂する。

「もー、忠くんのエッチ！ スケベ！」

「……何か、ビンタも強くなっていませんか」

「は？」

「すいません嘘ですごめんさい」

またさっきのを食らってはたまらない。……でも、痛みが引くのもめっちゃ早く早い気がする。

「目も良くなって……耳もよく聞こえる気がするな」

「肩こりも腰痛もない。子供の頃のように体が軽いね」

「嗅覚も心なしか鋭くなった気がするよ。なんか柚香の匂い、いつもよりエロいような」

またビンタが襲うが、今度は躲すことができた……ええ！？

「おい……マジかよ。お、俺が柚香のビンタを躲せる日が来るなんて……」

「絶対当たったと思ったのに……」

柚香がしよげるも、顔を真っ赤にして怒り出した。

「もう！ 忠くんはいつもスケベなこと言ってる！」

「お、お前の体がダイナマイトなのがいけないんだろ！」

「ぬあーんですってええー！！？」

「わー、ご、ごめんさいい！」

怒った柚香が僕を追いかける。僕は慌てて逃げ出した。足がらくらくと回転し、ぐんぐんと速度が上がる。機械に油を差したような感覚だ。

「こらっ！ 待てっっ！」

「げっ、やばっ」

僕は外に出て逃げることにした。ほとぼりが冷めるまで守夫の家にかくまってもらおう。放っておけば彼女の怒りも収まる。いつもそうだ。それに、心身ともにスッキリサッパリした新しい自分を見てほしかった。

守夫の家に着く。足が速くなったため、あつという間に到着だ。インターホンを鳴らしても返事がない。

「守夫？ おーい、いるんだろ？」

家の中から確かに物音と、守夫の匂いがする。意識して嗅いだのではなく、体が勝手に認識してしまうのだ。

「守夫？ 入るぞ」

ドアの鍵は開いていたが、ガキリと嫌な音がした。居間に入ると、守夫がわなわなと震えながら床にへたり込んでる。

「守夫！？ おい、どうしたんだ！」

「……」

守夫の口が開くが、あうあうと要領を得ない。彼は体を痙攣させた。顔色が死人のように真っ青だ。

「おい……守夫？」

頭の中で何かが閃いた。そうか、こいつはまだ体が重いのか。体の軽さを教える使命感が急速に膨れ上がった。

「絶対当たったと思ったのに……」

「おい……マジかよ。お、俺が柚香のビンタを躲せる日が来るなんて……」

「絶対当たったと思ったのに……」

「絶対当たったと思ったのに……」

君もなれるよ

南風 こまち

なんてこった。とうとう忠もやられてしまった。
僕は窓の外を見て縮み上がり、忠を止められなかった
ことを後悔した。

「柚香を元に戻すって言って聞かなかったからな、あの
バカ……こつちにはワクチンはおるか、それ以前に治す
手段は何もねえってのに」

忠は真つ直ぐ僕の家付近に近付いてくる。インタホンを鳴
らすが、当然無視。僕はいない。留守だ。帰ってくれ！
思いは届かず、彼は何か大声でうめきながら近づくと、
ドアにはめちやくちや頑丈な鍵をかけたはずなのに、ガ
キリと一発でぶつ壊れる音がした。

「ひさ」

僕はあまりに怖くて床にへたり込んでしまう。

忠が……いや、忠だったはずのものが居間に入ってきた、
僕に真つ直ぐ近付いてくる。何か言っているのか、
あうあうと声にしかかたてない。

「忠……や、やめろ……僕たち、友達だろ？ だから諦
めてくれよ……」

恐怖と緊張で顔が真つ赤になる。体が勝手に後ろに後
ずさりを始め、僕は脱兎のごとく逃げ出した。無駄だっ
た。もはや人間ではなくなった『彼』はあつという間に
僕を捕え、押し倒した。

「は、……離せえ、このやろう！ うわああああ！」

*

*

遠い昔、ある科学者による主導のもと、薬が開発され
た。今となつてはその正確な薬の名前を知る者はいない。
その薬を投与された人間は、体の不調が一挙に治り、非
常に強力、快適、安全な肉体を手にとされた。

しかし、臨床試験は失敗に終わった。

薬を投与された人はとても人間とは思えない姿になり、

他の人を襲うようになった。人類は対抗しようとしたが、
足並みが揃わなかった。それに、人類よりも俊敏かつ頑
丈、高い持久性を誇り、そして五感が異常なまでに研ぎ
澄まされた相手だった。かなうはずもない。こうして人
類はあつという間に淘汰されていった。

生き残った残り少ない人間たちによると、薬の名前が
残っているという。開発を行った科学者たちの名前の頭
文字から取ったらしき文字だそう。その文字を使う文
明が消滅したため、今や残された人類には解読が不可
能だ。

Zombie

それが、薬の名前らしい。